

現状把握

高校生の学び、職業意識の実態

進学校での 平日の家庭学習時間が減少

ベネッセ教育研究開発センターの調査によると、高校生の平日の家庭学習時間は2004年と09年とでは変わらない。ただし、高校の偏差値別（*1）に見ると、中堅校と進路多様校では増え、進学校では減っている（図1）。また、進学校の成績中下位層は、中堅校の成績上位層と比べて学習時間が少ない。

部活動と家庭学習時間との関連を見ると、部活動加入の生徒の方が、部活動を途中でやめた生徒よりも平均学習時間が多い（図2）。

「なりたい職業があるか」と尋ねたところ、04年調査と比べて「ある」と答えた子どもは小中高とも、どの学年でも減った（図3）。特に、高校生の減少幅は大きい。

高校生の学び、職業意識の実態

図1 高校偏差値別・平日の家庭学習の平均時間（高1生、高2生合算）



図2 部活動参加の有無と平日の家庭学習時間（高1生、高2生合算）

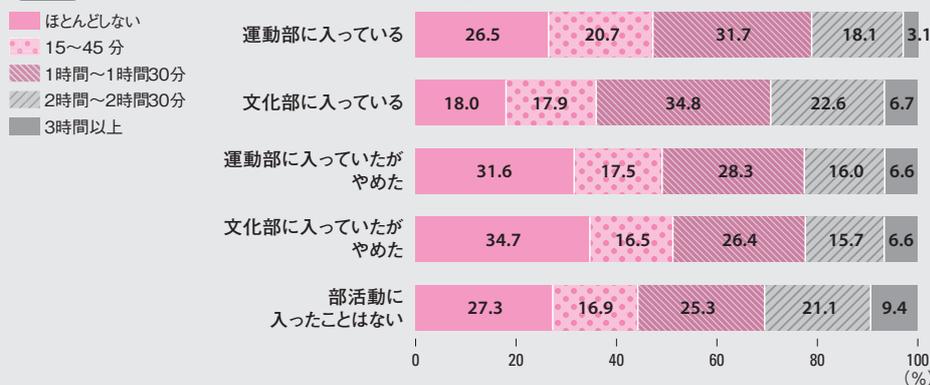


図3 「将来なりたい職業がある」と答えた割合



図1~3出典 / Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

*1 「進学校」は進研模試偏差値が60以上、「中堅校」は偏差値50~59、「進路多様校」は偏差値50未満をそれぞれ目安とする

生徒の学びに対する姿勢や教師の意識は、どのような状況にあるのか。高校教育の役割を考える前に、押さえておきたいポイントを整理した。

生徒の実態と教師の意識

高校教師の意識

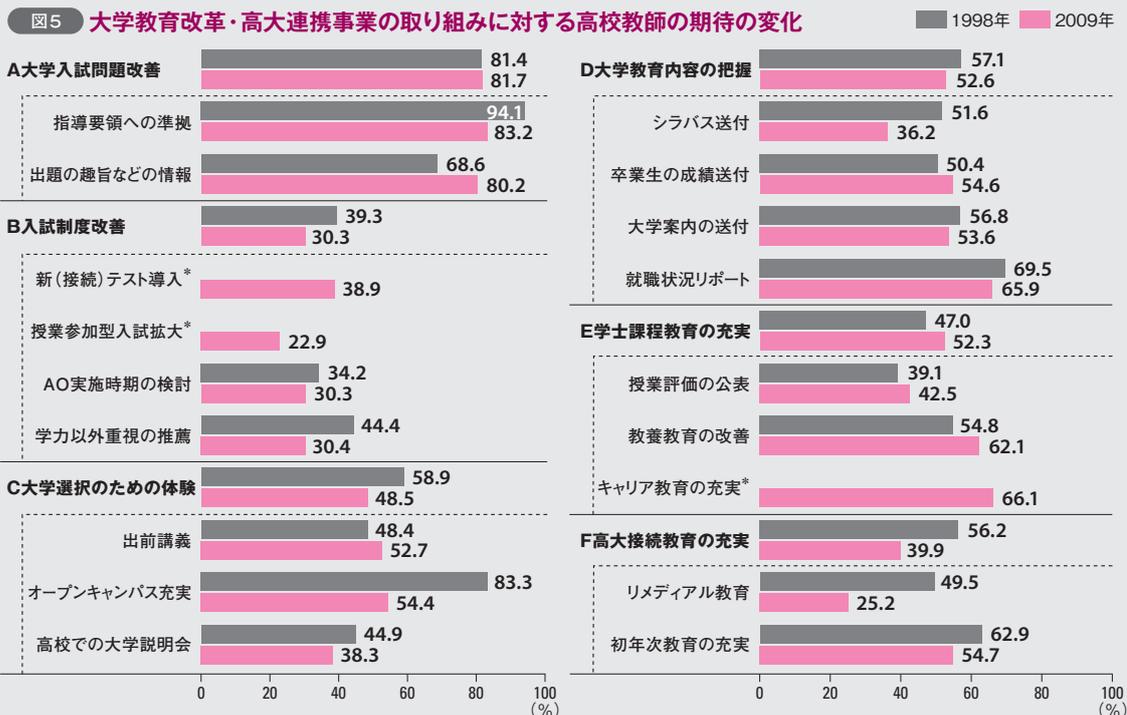
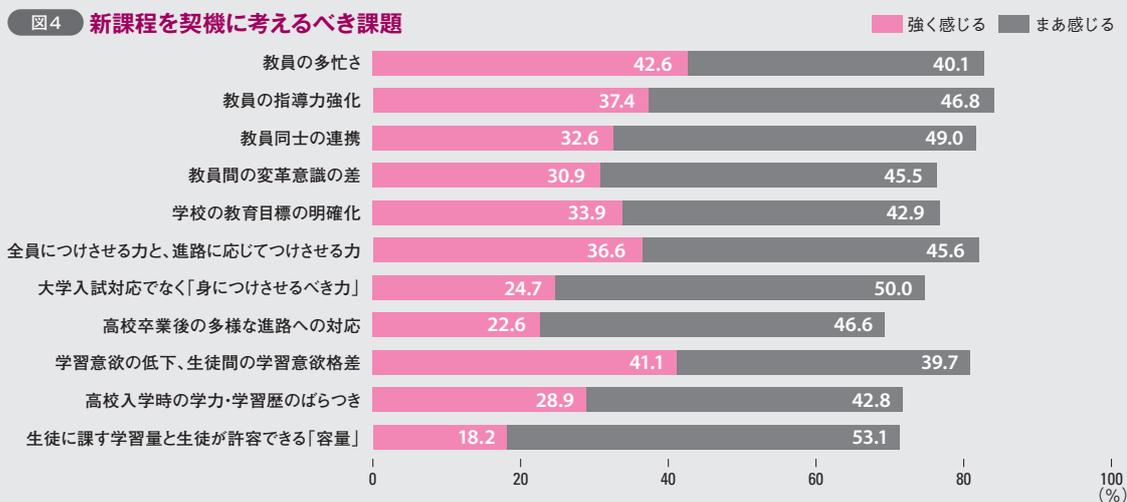
「学び」を軸にした 高大連携に期待

新課程の実施（*2）による影響や大学進学率5割以上という状況下で、教師はどのような意識を持っているのか。

高校新課程を前に、教師が指導上の課題として大きいととらえているものの1つは、生徒の「学習意欲の低下、生徒間の学習意欲格差」だ（図4）。中学校の新課程では、国語、社会、数学、理科、英語などの授業時数が増える一方、成績下位層対策などに充てられていた「選択教科」が原則としてなくなり、学力格差が広がる可能性もある。

大学入試が生徒の学習動機にはなりにくい中、教師が大学教育改革や高大連携事業に期待することは、オープンキャンパスの充実などではなく、「出題の趣旨などの情報」「授業評価の公表」などであり、「学び」を軸にした高大連携や大学教育の中心を重視する傾向が強い（図5）。

高校教師の意識、期待



*2 中学校の新課程は2012年度から全面实施。高校の新課程は2013年度から学年進行で実施(12年度から数学と理科は先行実施)